

近世河川絵図の分類と史料吟味

小野寺 淳

- | | |
|------------------|-----------------|
| I はじめに | Ⅲ-1 北上川水路図 |
| II 近世河川絵図の分類と所在 | Ⅲ-2 最上川水路図 |
| II-1 治水に関する河川絵図 | Ⅲ-3 阿武隈川水路図 |
| II-2 堤外地に関する河川絵図 | Ⅲ-4 富士川水路図 |
| II-3 用水・上水の河川絵図 | IV 筑後川絵図の史料吟味 |
| II-4 河川交通の河川絵図 | V 木曾川川並絵図の史料吟味 |
| II-5 地誌的な河川絵図 | VI 調布玉川惣画図の史料吟味 |
| III 近世河川水路図の史料吟味 | VII おわりに |

I はじめに

江戸時代に作成された河川絵図は、従来の古地図研究のなかでもほとんど言及されることがなかった。河川絵図に限らず、近世の絵図は多種多様であるため、国絵図、城下町絵図、五街道分間絵図など幕府や諸藩の旧蔵本、あるいは広く流布した木版刷りの絵図の研究に限定されてきたといっても過言ではないであろう。近世の河川絵図ひとつとっても、その所在すら十分に知られておらず、研究の端緒すら開かれていないのが現状である。このため、管見の限りではあるが、本研究ではこのような近世河川絵図の所在を明確にし、史料的価値が高いと考えられる絵図について史料吟味を加えておくことにする。

日本全国の河川絵図のなかから「近代測量以前において、川船の通船水路を描き、特に難所を詳細に描くことを目的とした絵図」を「河川水路図」と定義し、それぞれ複数現存している北上川・最上川・阿武隈川・富士川の河川水路図を事例に、絵図の表現から作成主体の空間認識を解読するという方法で研究を行ってきた¹⁾。この研究の過程で、日本全国の主要な河川に数多くの河川絵図が現存していることが明らかになってきた。もちろん今後各地で調査が進むに従い、前述の4河川のように複数の河川水路図が見出される可能性があると考えられるが、ここではひとまず管見のさまざまな河川絵図を整理することによって、河川水路図の性格をより明確にしておきたい。このため、本研究では治水に関する絵図は最小限に止め、河川交通に関する絵図を中心に取り上げた。

近世河川絵図の所在調査は、つぎのように行なった。まず、地方史研究協議会編『歴史資料保存機関総覧』²⁾に掲載された諸機関の所蔵文書のうち、所蔵目録、特に絵図目録から「○○川絵図」などの表題をもつ絵図を検索した。つぎに、『国書総目録』³⁾、都道府県史、主要な河川流域の市町村史とそれらの近世文書所在目録を検討した。この作業は主として筑波大学付属図書館所蔵本を利用した。この結果をもとに、都道府県の県立図書館・県立博物館・県史編纂室などで情報を収集し、現地で絵

図の確認を行なった。結果として、北陸地方・山陰地方・徳島を除く四国地方は、現地調査を行っていない県もある。また、北海道は北海道大学付属図書館北方資料室での閲覧のみであり、沖縄県は現地調査を実施していない。なお、北方資料室には明治期の石狩川図などがある。

調査の段階で、閲覧の許可が得られなかったもの、情報のみにとどめてあえて閲覧を申し込まなかったものもある。なお、前田家の尊経閣文庫では目録に河川絵図が記載されているが、現在所蔵されていないことを教示していただいた。このように、本研究は我が国の現存する近世河川絵図のリストを作成することが目的ではなく、あくまで主要な河川絵図の史料批判である。

II 近世河川絵図の分類と所在

「〇〇川絵図」と称する絵図は、所蔵目録などから検索しただけでも百数十点にのぼるが、それらの絵図の作成目的などは多種多様である。また多くは付随文書を欠くため、厳密な作成目的や作成年次の考証が困難であることも多い。しかしながら、近世河川絵図というジャンルを仮に設定した場合、作成目的から以下のように大分類することができる。

- (1) 護岸堤を示した治水に関する河川絵図
- (2) 堤外地の開発や所有を示した河川絵図
- (3) 農業用水や上水に関する河川絵図
- (4) 河川交通に関する河川絵図
- (5) 地誌的な性格を持つ河川絵図

ただし、「〇〇川絵図」とあっても短区間の部分図である例は除くこととし、逆に名称として「〇〇川絵図」と記されていないとも、比較的長区間の河川を描いている場合は加えることとした。このような河川絵図のうち代表的なものを第1表に示し、以下分類に従ってその分類上の特色を記す。

II-1 治水に関する河川絵図

現存する河川絵図の多くは、治水に関する絵図である。これらの多くは築堤箇所を中心に描かれた部分図であり、計画図あるいは争論図としての性格が強い。概して小型の絵図が多いが、第1表には比較的大型で代表的なものを取り上げた。

関東の河川はいわば幕府の直轄河川であって、諸藩はその川普請を割り当てられた。山口県文書館所蔵の「関東筋川普請各藩分担図」は、川普請を命ぜられた毛利藩が所蔵していた絵図で、絵図には諸藩の分担が書き込まれている。

木曾川・揖斐川・長良川の木曾三川は、特に治水に関する河川絵図が多く残されている。岐阜古地図研究会編著『美濃・飛騨の古地図』⁴⁾には、これらのリストと解説が掲載されている。とくに、岐阜県歴史資料館には、美濃郡代笠松陣屋堤方役所文書、大垣の郷土史家林周教蒐集文書などがあり、これらには治水の河川絵図が多く含まれている。この中のひとつ宝永1年(1704)「長良川通絵図」は、宝永2年から実施された普請の計画図であり、宮上村より河渡村までの部分図である。本来は普請箇所全域に及ぶ絵図が揃っていたと推定される。

第1表 主要な近世河川絵図の分類別一覧

分類	河川絵図名	年次	所在
1. 治水	関東河川巨細図 (図書局文庫)	—	国立公文書館内閣文庫
	撰川二川水入図・撰津国芥川筋絵図	—	京都大学文学部付属博物館
	淀川沿岸図	—	大阪府立図書館
	木曾三川大絵図 (高木家本)	—	名古屋大学付属図書館
	長良川通絵図 (笠松陣屋堤方役所文書)	1704	岐阜県歴史資料館
	関東筋川普請各藩分担図 (毛利家文庫)	1786	山口県文書館
2. 堤外地	岩木川流域図 (津軽家文書)	—	弘前市立図書館
	天龍川通分間絵図 (葵文庫)	—	静岡県立中央図書館
	淀川通絵図	1770	大阪府立図書館
	吉野川絵図	1840	徳島県立図書館
	筑後川絵図	1819	福岡県久留米市など
	菊池川全図	1855	熊本県菊池市教育委員会
	白川など熊本藩領内諸川絵図 (6点)	後期	熊本県立図書館
3. 用水・上水	米代川絵図	—	秋田県立図書館
	小貝川絵図 (狩野文庫)	—	東北大学付属図書館
4. 河川交通②	玉川上水・神田上水大絵図	貞享	東京都公文書館
	通船川出来絵図 (阿賀野川・信濃川間)	1759	新潟市郷土資料館
	利根川河岸絵図	1772—80	群馬県高崎市倉賀野
	佐波川筋絵図 (毛利家文庫)	文化	山口県文書館
	③ 河絵図 (淀川) (木版) (池田家文庫)	寛政	岡山大学付属図書館など
	乗陸必携大川便覧 (木版)	天保	大阪城天守閣など
	④ 木曾川川並絵図	—	徳川林政史研究所など
5. 地誌	懐中鑑 (多摩川)	—	東京都青梅市
	関八州川筋絵図 (旧幕引継文書)	1783	国立国会図書館
	調布玉川惣画図 (木版)	1845	多摩市立図書館など
	球磨絵図	1773	熊本県人吉市

注1) 一覧に示した河川絵図のなかには複数の写本が現存するものや、木版の場合など所蔵者が複数あるが、代表例のみに割愛した。なお個人所蔵の場合は所蔵者の市町村名とした。

2) 作成年次は西暦で示したが、年次が明確でないものは年号などで便宜的に処理した。実線は不明を示す。

3) 河川交通①河川水路図については、第2表に示した。

II-2 堤外地に関する河川絵図

堤外地という表現は必ずしも適切とはいえないが、沿岸地先の流作場や中州など流路変更で所有が問題となる箇所、あるいはその開発を示した絵図である。地方文書のなかには同様の作成目的を有する数か村単位の小型の絵図がしばしばみられるが、表現された内容が興味深く、比較的長区間を描いた河川絵図を第1表に示した。このうち、絵図分類の上で考証を必要とする筑後川絵図については章を改めて詳述する。

静岡県立中央図書館 (葵文庫) の「天龍川通分間絵図 從渡ヶ島村至東駒場村・西弥助新田」は、中州の流作場5か所に関する高調べを表現した絵図である。

「淀川通絵図」は明和7年 (1770) の写本であり、伏見一大坂間における、とくに堤外地の所領・石高・反別を記載している。

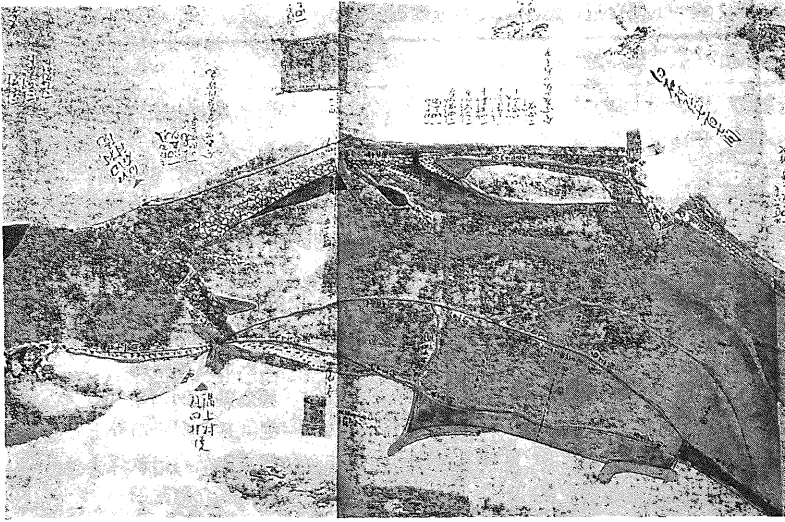


写真1 菊池川全図（菊池市教育委員会蔵）
安政2年（1855）の作と推定され、折本である。写真は玉名市と菊水町境に位置する白石堰付近を拡大したもので、堤は黄色、砂州は灰色、開発耕地は赤色で示している。

「吉野川絵図」は徳島の豪商であった森敬介旧蔵本であり、詳細は今後検討されねばならないが、流路変更にもなう郡境・村境を図示している。

「菊池川全図」は菊池市教育委員会蔵本と熊本県立図書館蔵本が現存している⁵⁾。両者を比較すると、菊池市教育委員会蔵本はより丁寧に描写されている点で、原本の可能性が高い。約2000分の1の縮尺で、水源から河口までを描き、堤外地の開発耕地を赤で着色している。菊池市教育委員会蔵本には安政2年（1855）の貼紙があることから、同年を作成年次としている。

熊本県立図書館では、菊池川のほか、緑川（3巻本）・氷川・白川・加勢川・球磨川の6河川の絵図が所蔵されている。菊池川・緑川・氷川・白川の絵図は年号の記載がないが、球磨川絵図は天保7年（1836）9月、加勢川絵図は文政6年（1823）5月と作成年次が異なる。しかし、記載内容をみると、附州などが色別されている点、縮尺・方位や手永名が記されている点など類似点もある。球磨川絵図は河口より八代・球磨郡境までを描き、河口の中州開発を図示した絵図と考えられ、後述する「球磨絵図」とは異なる。

Ⅱ-3 用水・上水の河川絵図

本流からの取水堰、用水路と水掛かりの村々などを表現している。点数も数多いと考えられるが、所在調査の段階で農業用水路図を積極的に検索していないため、ここでは管見の点数を示すに止める。なお、岡山大学付属図書館蔵の「吉井川筋之図」もここに含まれる。

「米代川絵図」は、南部領土沢井から能代までを描いた87×344cmの折畳み絵図である。沿岸の集落間の距離、水深、水掛高を注記している。

第1表では「小貝川絵図」を代表例としてあげたが、狩野文庫には「大阪五川之図」、「利根川筋之図」、「遠州天龍川通絵図」、「大井川分間絵図」、「鬼怒川通絵図」などの小型の写本が多く所蔵されている。これらの多くは治水・用水の絵図である。

玉川上水の絵図は、貞享の頃の作とされる「玉川上水大絵図」・「神田上水大絵図」⁹⁾のほか、正徳末年の「江戸上水図」⁷⁾、幕府普請奉行上水方道方の石野広通が寛政3年(1791)にまとめた「上水記」の付図(東京都水道局所蔵)などが現存している。また小金井市教育委員会保管大久保家文書には、明治5年「玉川上水実測図」、同4年11月以前と推定された「(玉川上水絵図)」がある⁸⁾。

Ⅱ-4 河川交通の河川絵図

河川交通に関する河川絵図は、さらに以下の4つに分類することが適切である。

① 川船の通船水路を描き、特に難所を詳細に描くことを目的とした絵図＝河川水路図

河川水路図は4河川計24点にのぼるため第1表では省略し、第2表に提示し、章を改めて詳述する。なお、新潟県東蒲原郡津川町には、明治前期の阿賀野川水路図が現存する⁹⁾。

② 難所は描かれていないが、川船の水路に関する絵図

水路開削の計画図または河岸の位置を示した絵図などがある。

③ 旅人案内用として兩岸の景観や河岸の位置・道法を描いた絵図

④ 筏流しに関する絵図

分類上「淀川兩岸一覽」などは名所図会の一種とし、また円山応挙、桂豊信、伊藤若沖がそれぞれ描いている「淀川図巻」は絵画と考えると河川絵図の範疇から除くこととした。

②に分類した絵図のうち、「通船川出来絵図」と「佐波川筋絵図」は水路開削のための計画図である。一方、「利根川河岸絵図」は倉賀野河岸より行徳河岸までの河岸名・番所などを記載している¹⁰⁾。群馬県高崎市倉賀野の須賀太郎家と須賀健一家にはほぼ同様の絵図が所蔵されており、作成年次は記載されていないが、安永頃と推定されている¹¹⁾。

③旅人案内用として兩岸の景観や河岸の位置・道法を描いた絵図は、淀川を描いた絵図に多くみられる。これらは、近世後記における社寺参詣の興隆に相俟って増加した。「河絵図 自伏見豊後橋至大坂安治川伝法尼崎之川口」は木版刷りの絵図で、伏見と大坂を中心に沿岸の村々とその主な道法などが描かれている。内閣文庫などに所蔵されている「二水合流図」を簡略化して、観光案内用にしたものといわれている¹²⁾。寛政9年(1797)版の「河絵図」は「増修大坂指掌図」の裏刷りで、岡田玉山作、版元播磨屋赤松九兵衛、55×43.5cmの三色刷であった。また、『国書総目録』にも掲載されている大阪府立図書館所蔵の天保6年(1835)「淀川筋絵図」は、「河絵図」版本を荒川憲章が筆写したものである。

寛政期の「河絵図」は、天保期の「乗陸必携大川便覧」¹³⁾へと受け継がれた。大坂の版元赤松九兵衛と京都の版元竹原好兵衛は、名所旧跡の記事など観光的要素をより強め、高島春松画による「乗陸必携大川便覧」を刊行した。その後、安政期と文久期には名所図会形式の「淀川兩岸一覽」¹⁴⁾へと継承された。

④筏流しに関する絵図は木曾川川並絵図が代表例であり、これについては章を改めて詳述する。東京都青梅市の中村家所蔵の「懐中鑑」は、絵図としては簡略であるが、筏の用水堰通行料を図示している¹⁵⁾。

II-5 地誌的な河川絵図

江戸時代の地誌書に官撰と私撰の地誌があるように、河川絵図にも藩が作成したと考えられるものと、地方文化人が作成したのものがある。前者の例は、「球磨絵図」で、後者の例は「調布玉川惣画図」である。第2表に示した最上川水路図のひとつ「松川舟運図屏風」は、本来の利用目的からすれば地誌的な性格を持つ河川絵図と考えることもできる。なお地誌とはいえないが、河川沿岸の村々を郡別に区分した「関八州川筋絵図」¹⁶⁾もここに加えた。「調布玉川惣画図」については、その作成目的などが明確になったため、章を改めて考察を加える。ここでは、「球磨絵図」について明らかになった点を記しておく。

「球磨絵図」の原本は、昭和27年人吉市教育会館における古美術展の開催後に紛失した。これ以前に2つの写本が作られており、その1つは現在熊本市武蔵ヶ丘の西重美家に所蔵されている。勤務の関係で転居したが、父親の西倉基は旧制人吉中学の国語教師であった。この絵図は寺社の由来などが注記されているが、原本の写真と照合すると、市房と人吉佐無田狩所の2箇所で書き込みが1行ずつ脱落しているという¹⁷⁾。しかし、写本としてはきわめて忠実に描写されていると思われる。

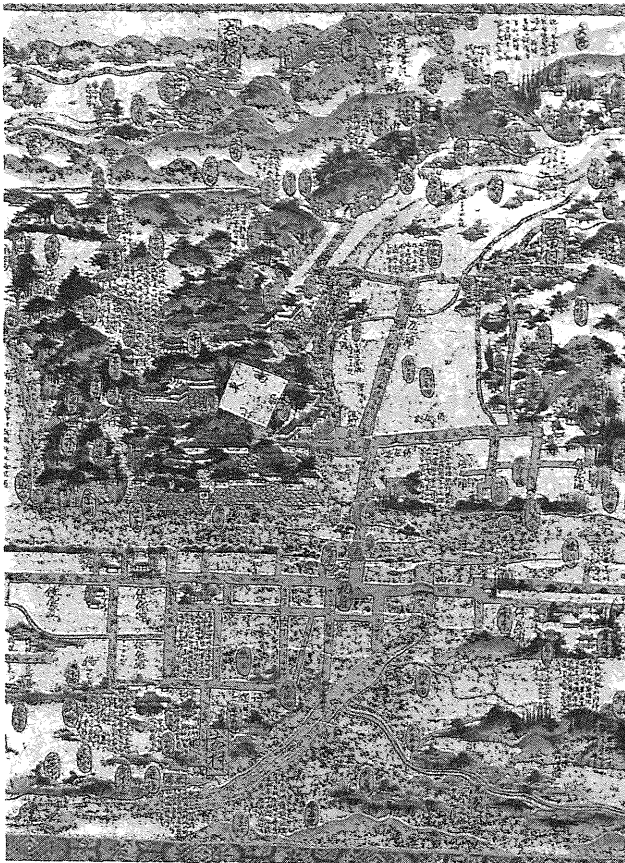


写真2 球磨絵図（熊本市武蔵ヶ丘 西重美家所蔵）

44.5×1107cmの巻物で、安永2年（1773）の作と推定されている。写真は人吉城付近で、人吉城対岸の城下町については、特に街路を図示している。村名は長方形、小名は小判形、一里塚は赤三角、といった記号で示され、寺社や用水路なども表現され、地誌的な内容を持っている。

Ⅲ 近世河川水路図の史料吟味

近世河川水路図は、近代測量以前において、川船の通船水路を描き、特に難所を詳細に描くことを目的とした絵図である。この定義に適合する河川水路図は、第2表の通りであり、以下河川別に個々の河川水路図の所在、作成の目的と年代などを明らかにしていく。

Ⅲ-1 北上川水路図

北上川水路図は6点現存している。いずれも盛岡藩領最南端に位置した黒沢尻（現北上市）から河口の石巻までを描いた河川水路図である。この点からのみでも、北上川水路図が盛岡藩の北上川廻米輸送に関連した絵図であることが明らかである。北上川水路図の所蔵先はいずれも本来所蔵していた原所蔵者ではなく、原所蔵者から移管または収集された。

北上川1は、昭和45年以後に旧盛岡藩御蔵物書役の斉藤家から移管された。奥書によれば、北上川1は盛岡藩勘定所へ提出した絵図の控えであり、この絵図は北上川の難所の実地検分によって作成されたことが明らかである。したがって、舟道と難所の記載が詳細であり、湯水期の浅瀬を航行するために大型の船から小型の舳下船に分載する舳下制の記載が盛り込まれている。この点の記載内容は他の北上川水路図もほぼ同様である。

北上川2は、石巻の郷土史家であり、郷土資料の収集家でもあった故毛利総七郎が収集した絵図で、毛利コレクションはその私設資料館である。北上川3は岩間初郎から宮城県図書館へ寄贈されたもので、当時巻物であった北上川2を昭和27年頃に模写した。ただし、番所を3か所書き落としており、完全な模写本とはいえない。

北上川4と5は盛岡市中央公民館へ移管された盛岡藩旧蔵文書のなかにある。北上川4は北上川2と酷似している。北上川4には嘉永3年（1850）と明治2年の奥書がある。嘉永3年の奥書は盛岡藩江戸屋敷台所入用の送り状で、桜田権太夫が「船中見届」をした旨が記されている。明治2年の奥書は東京台所米入用の送り状で、仙台藩領改所宛の通行許可願が付されている。このことから、北上川4は嘉永3年の「船中見届」に際して、北上川2またはこれと同一内容の河川水路図を模写したものと推定される。北上川5は記載内容において他の河川水路図と異質な面をもっている。他の河川水路図がすべて黒沢尻から描かれているのに対して、この絵図は逆に石巻から描かれている。また、他の河川水路図ではまったく描かれていない平野部の水田を図示している。しかし、今のところ北上川5の作成目的や作成年次については不明というほかない。

北上川6は故新戸部仙岳の収集によるもので、唯一の彩色絵図である。方位記号が図示され、限られた紙幅のなかに方位に合わせて河川の蛇行を描くため、河川を切断して描いている。したがって、河川をつなげるには巻物を切断しなければならない。このように、実測図ではない近世河川水路図のなかでは、最も実測図に近い表現方法を採用している。

以上のように、北上川水路図の作成目的は、盛岡藩の北上川廻米輸送を円滑に行なうために、北上川の難所とその難所を安全に航行するための舳下制を図示することにあったと考えられる。

第2表 近世河川水路図一覽

1.	北上川絵図	巻物	28×1,890cm	黒沢尻一石巻	宝曆2年(1753)	北上市立図書館
2.	「黒沢尻川岸より石巻迄川筋絵図」	冊物 (巻物を修正)	27×2,880cm	黒沢尻一石巻	——	石巻市毛利コレクション
3.	「黒沢尻川岸より石巻迄川筋絵図」	巻物	26×3,040cm	黒沢尻一石巻	——	宮城県図書館
4.	「北上川航路図」	冊物	27.8×2,880cm	黒沢尻一石巻	——	盛岡市中央公民館
5.	「北上川黒沢尻河岸より仙台嶺石巻落合川口迄之川筋絵図」	巻物	27.5×766cm	黒沢尻一石巻	——	盛岡市中央公民館
6.	「北上川黒沢尻河岸より石巻湊迄之絵図」	巻物	27.5×4,465cm	黒沢尻一石巻	弘化年間(1844—1847)	岩手県立図書館
1.	「羽州川通絵図 自米沢正部最上左沢」	折畳み式	28×1,180cm	糠野目一左沢	——	山形県立博物館
2.	松川舟運図屏風	屏風	6曲1双 (右) (左)	糠野目一荒砥 岡一左沢	——	米沢市宮坂考古館
3.	最上川川通絵図	巻物	27×870cm	山形船町一酒田	寛文8—寛保2(1668—1742)	山形市立大郷小学校
4.	須川・最上川絵図	巻物	30×866cm	山形船町一酒田	明治8年(1875)頃	山形市蔵王桜田 横山裕
5.	最上川舟運絵図	巻物	29×1,251cm	寺津一酒田	——	千葉県香取郡下総町 飯嶋浩通
6.	最上川通舟案内書	巻物	29.5×700cm	山形船町一酒田	天保7年(1836)8月	大石田町立歴史民俗資料館
7.	最上川水路図	巻物	16×470cm	上ノ山一酒田	——	山形県立博物館
8.	「自左沢至酒田 最上川絵図」	折畳み式	64×871cm	山形船町一酒田	——	西村山郡河北町 楨真司
9.	「最上川谷地押切渡より栢沢迄絵図」	巻物	67.5×800cm(乾) 67.5×700cm(坤)	谷地一清水 本合海一清川	延享3年(1746)4月下旬	鶴岡市致道博物館
10.	最上川絵図	巻物	55×980cm	谷地一清川	——	東村山郡山辺町 稲村七郎左衛門
1.	阿武隈川通船絵図	巻物	31×330cm	甲子山一本宮	嘉永2—文久2(1849—1862)	西白河郡矢吹町 円谷重夫
2.	阿武隈川上流絵図	巻物	30×1,330cm	須賀川一福島	天保13年(1842)	郡山市西田町 増子寿郎
3.	阿武隈川舟運図	巻物	30×1,285cm	福島一水沢	明和6—7年(1769—1770)	福島市資料展示室
4.	阿武隈川水路図	巻物	33×1,275cm	福島一水沢	文政5—6年(1882—1823)	福島県立図書館
5.	阿武隈川絵図	巻物	38×860cm	耕野一荒浜	安政2年(1855)	宮城県図書館
1.	富士川絵図	巻物	16×702cm	青柳一清水	——	南巨摩郡韮沢町 青山富貴江
2.	富士川通船沢より岩淵迄絵図面	巻物	25×527cm	(青柳)一岩淵	安政4—6年(1857—1859)	南巨摩郡増穂町 小河内為信
3.	「富士川通船沢より岩淵迄絵図面」	巻物	25×643cm	青柳一岩淵	安政4—6年(1857—1859)	甲府市伊勢町 小林さだ

注1) 図名のある河川水路図はカッコを付し、図名のない河川水路図は名称を適任与えた。

2) 作成年号を記した河川水路図は作成年号にアンダーラインを、作成年号を推定しうる河川水路図は作成年号を記入した。

3) 最上川5は一部欠、富士川2は前欠のため、巻物の長さは短くなっている。

Ⅲ－２ 最上川水路図

最上川水路図は10点現存している。描かれた区間に注目すると、糠野目一左沢間（最上川1・2）、山形船町一酒田間（最上川3・4・5・6・7・8）、谷地一清川間（最上川9・10）の3つにおおそよ区分することができる。糠野目一左沢間は、一部他領が含まれるが、米沢藩の領内である。山形船町一酒田間は山形盆地の幕府領ならびに山形藩・上山藩の廻米輸送ルートであった。谷地一清川間は、おおよそ新庄藩の領内である。

最上川1と2は、糠野目一左沢間を描いている。最上川1は、故長井政太郎収集の絵図であるが、原所蔵者は不明である。最上川2は屏風絵図であり、現在の米沢市中町に居住していた小倉某家より、明治30年頃に郷土資料の収集家であった故宮坂善助が入手した。近世期の中町は米沢城下町の外に位置しており、半士半農の生活を営む原方衆の居住地区であった。原方絵図のひとつ明和6年（1769）「諸奉公人屋舗絵図」¹⁸⁾によれば、中町に小倉姓は存在していないが、東隣の片町には小倉伝左衛門の名がみられる。小倉伝左衛門は上杉家譜代の藩士であるが、米沢藩最上川廻米輸送が始められた元禄期には8石3人扶持の馬廻配下という下級藩士であった¹⁹⁾。したがって、下級藩士が屏風絵図を所有していたとは考えられず、最上川2の原所蔵者は小倉伝左衛門家ではないと推定されるが、少なくとも米沢藩家中の所蔵であったことは間違いなからう。なお、屏風の右双上段右隅と左双上段左隅に「古泉齋図之」と記されているが、御用絵師岩瀬家に古泉齋の号を称した者はいない。

最上川3は、山形市船町の阿部忠家より大郷小学校へ寄贈された。阿部忠家は三右衛門を代々名乗り、船町三間屋のひとつであった。この絵図は最上川水運の研究者に広く知られており、寛文8年（1668）から寛保2年（1742）の間の作と推定されている。この推定年代は図中の大石田の箇所「御代官所山形領東根領」と注記されている点から、大石田が幕府代官領・山形藩・東根藩に三給支配された時期である²⁰⁾。

最上川4は山形市蔵王桜田の横山裕家所蔵であり、最上川3に酷似している。横山家は下桜田村の名主で、荷宿を経営していた。下桜田村は船町で最上川に合流する須川沿岸に位置し、船町より約12キロメートル上流にあたる。近世期の須川では水運は行なわれていなかったが、明治8年5月19日に「須川筋船道御見分願書」を山形県参事薄井龍之に提出し、通船許可を願い出た。この願書には横山三九郎のほか、船町村伊藤市左衛門ら山形船町の船持が名を列ねている。この点から、最上川4は最上川3の明治初期の写本と推定される。

最上川5は、千葉県香取郡下総町の飯島治通が佐原市の古物商より購入した。古物商の仕入れ先は明らかにされないが、佐原市津宮の旧家の所蔵かといわれている。利根川沿岸の津宮は香取神宮参詣者が上陸する河岸でもあり、村田屋・佐原屋・相模屋などの河岸問屋があった。現在のところ、これらの河岸問屋の旧蔵か否かは判断がつかない。むしろ、最上川水運との関連を考えれば、佐倉藩堀田家を想定しなければならない。堀田家は、延享3年（1746）に山形より移封され、その後も山形に4万石の所領があった。この所領の廻米には最上川水運が利用された。このため、最上川5は佐倉藩関係者旧蔵の可能性もある。

最上川6は尾花沢市行沢の石山忠家より、大石田町立歴史民俗資料館に移管された。絵図の奥書より、天保7年(1836)の写本であることが明らかである。また、石山儀左衛門の懇願により、延沢新町(現尾花沢市)八幡山金剛院の義弁法印が写したとある。しかし、この絵図に類似の絵図は見い出していない。

最上川7は、最上川1と同様に故長井政太郎収集の絵図である。須川の水源蔵王を描き、上山の地名を記していることから、原所蔵者は須川流域に居住していた可能性がある。長崎・大石田・本合海・清川・酒田の5か所に方位記号を描いている。河川水路図で方位記号を描いた他の絵図は、弘化年間(1844—1847)の北上川6のみで、明治前期では阿賀野川水路図にみられる。この点から、早くても幕末の作と考えられる。

最上川8は、河北町谷地の楨真司家所蔵である。谷地は二給の相給村落で、幕府領の新町・松橋・大町・荒町・前小路・上工藤小路と、新庄藩領の北口・下工藤小路に分かれていた。楨家は藤左衛門を代々名乗り、幕府領新町の名主を世襲した。谷地では最上川河畔の畑地で、朝霧の深くかかる所を適地とする紅花を栽培した。「谷地花買仲間」が結成され、楨家も紅花問屋を経営した。染色原料として主に京都へ出荷された紅花は、大石田から酒田まで最上川水運を利用し、谷地—大石田間には最上川三難所といわれた基点・みかの瀬・隼があるため、紅花は難船の危険を避けて大石田まで陸送されたといわれている。したがって、紅花の輸送経路ではない山形船町—酒田間を描いた絵図を必要とする理由は希薄であるが、幕府領名主として幕府御城米輸送経路であった山形船町—酒田間の絵図を作成した可能性が考えられる。

最上川9は鶴岡藩酒井家旧蔵本で、乾坤2巻の装飾性の高い絵図である。坤には新庄藩郡奉行岩間作右衛門による延享3年(1746)4月下旬の奥書がある。奥書は上下2段に分かれ、上段は国絵図の郡境の異同、下段は清水より柏沢までの道程が記されている。この奥書の考証は別稿(「絵図にみる最上川の空間認識」)に記したため、ここでは結論のみを記す。最上川9は延享3年に新庄藩から鶴岡藩に提出された。奥書には正保国絵図における郡境の誤りを元禄の国絵図改訂に際して修正した旨が記されているが、絵図そのものの表現内容と奥書の内容はまったく無関係である。絵図そのものは延享3年以前に作成されたもので、鶴岡藩との郡境調停の付随絵図として再利用されたものと考えられる。

最上川10は山辺町大字蕨の稲村七郎左衛門家所蔵である。大字蕨は白鷹丘陵の中央に位置し、稲村家は戦国末期に土着したといわれている。近世中期には、京都や越中に出荷する青芋・蠟・紅花の間屋経営を行なった豪商であった。このため、大石田に川船を所有していたこともある。絵図は明らかに最上川9の写本であるが、最上川9で色別されている新庄藩領の村々を色別していない。稲村家と新庄藩、または鶴岡藩との関係については明らかではないが、豪商ゆえに藩所有の絵図を写す機会が与えられたものと推定される。

なお最上川5を除く9点については、山形県立博物館1985年度特別企画「最上川—紅花の道」展で展示された。(金山耕三(1986):資料紹介最上川絵図.山形県立博物館研究報告7.)

Ⅲ－3 阿武隈川水路図

阿武隈川水路図は5点現存している。描かれた区間によって、上流部（阿武隈川1・2）、中流部（阿武隈川3・4）、下流部（阿武隈川5）に区分することができる。須賀川―福島間は、蓬萊峽と呼ばれる狭窄部のために、川船の通船が困難な不可航区であった。このため、阿武隈川水運は上流部と中・下流部が断絶していた。阿武隈川上流部、すなわち郡山盆地では、たとえば塩は常州平潟港から御斎所峠を牛背で運ばれた。この塩の量は年平均10万俵にものぼったといわれ、阿武隈川上流部の通船計画がしばしば問題となっていた。

阿武隈川1は西白河郡矢吹町の円谷重夫家所蔵である。円谷家は明岡村の庄屋を勤め、質屋・太物商・醬油造を営み、会津藩廻米運送方問屋、常州平潟より会津まで諸荷物払問屋の経営を行なった。嘉永2年（1849）4月、明岡村円谷茂平・川原田村良平・三春町逸作の3名は幕府代官所へ通船願いを提出した。翌年には大和久村市右衛門も加わり、安政2年（1855）8月から3か年の試通船が実現した。実際には文久2年（1862）まで延長されたが、最大の難工事であった乙字瀧の開削に成功し、明治15年頃まで通船が行われた²¹⁾。こうした経緯のなかで、阿武隈川1は嘉永2年から文久2年にわたって代官所へ提出された願書の付図として利用されたものと考えられる。

阿武隈川2は郡山市西田町根木屋の増子寿郎家所蔵である²²⁾。所蔵者によれば、天保13年（1842）の作とされているが、都合により付随文書の閲覧を行なえない状況にあるため、断定はできない。絵図の表現からみると、舟道が暗礁や川原の上に引かれている点などによって、水路開削のための計画図であったことは明らかである。とくに蓬萊峽と呼ばれる狭窄部の水路開削を目的としたものと推定される。しかし、この計画は実現しなかった。

阿武隈川3・4は、河川水路図の中では数少ない鳥瞰図法で描かれ、表現様式と内容が酷似している。阿武隈川中・下流の水路では、水沢河岸の対岸の沼ノ上河岸で小型の小鵜飼舟の積荷と大型の罾船の積荷を積み換えた。絵図に描かれた福島―水沢間是小鵜飼船の航行区間であり、小鵜飼船は猿跳峽と呼ばれる狭窄部を乗り切るために、木曾川の小鵜飼船を改良して導入された。

福島市資料展示室所蔵の阿武隈川3は、昭和31年故宮内富貴夫によって寄贈された。宮内富貴夫は書店経営のかたわら古銭・古時計・燈火・養蚕・煙草などの資料を収集した。原所蔵者は不明であるが、安田初雄によって詳細な考証が加えられている²³⁾。現在剝がれて無くなっている瀬上河岸の部分の付箋を主たる根拠とする点に若干の疑問も残るが、以下のような考察は納得できるものである。安田初雄の野帳に記録された瀬上河岸の付箋の内容は、元請負渡辺十右衛門が明和6年（1769）11月から12月、翌年6月に岩石開削工事を行なった経緯を記している。主にこの点から、渡辺十右衛門から工事請負を引継いだ上総屋幸右衛門が、明和6年11月から翌7年にかけて作成し、幕府に対する報告または願書の付図として用いられたとされている。

福島県立図書館所蔵の阿武隈川4は、「川村瑞軒ノ原図ニヨル」という書き込みがあるため、戦前から河村瑞軒の絵図として古田良一²⁴⁾や田中館秀三²⁵⁾によって紹介された。しかし、安田初雄は文政5年（1822）から翌3月までに作成されたとし、阿武隈川3の写本であることを明らかにした²⁶⁾。この根拠は、沼ノ上河岸「渡辺輪四郎」と水沢河岸「宍戸弥右衛門」が同時に問屋を勤めた時期を考証

したものである。

宮城県図書館所蔵の阿武隈川 5 は、一説には河口の荒浜の小学校に保管されていた絵図を移管したのではないかとわれている。荒浜の武者物三家は浦役人を世襲したが、武者家には河川水路図は所蔵されていない。阿武隈川下流水路では、幕府御城米、会津藩廻米なども輸送されたが、これらは仙台藩の水運制度に従った輸送が行なわれた。仙台藩は荒浜に川口番所を設置し、玉崎（現岩沼市）の渡辺家などの船肝入が管理・運営した。この渡辺家にも河川水路図は残されていないが、仙台藩領内の水路を描いた阿武隈川 5 は船肝入などが作成したと考えるのが妥当であり、その作成目的は仙台藩廻米輸送の運営にあったとみられる。

III-4 富士川水路図

富士川水路図は 3 点現存している。富士川 2 と 3 は表現様式・記載内容とも一致した絵図であるが、両図と富士川 1 は全く関連性がない。

富士川 1 は、『富士川水運史』²⁷⁾ を著わした故青山靖が、生前に増穂町青柳で千鳥書房を経営する安藤政治より譲り受けた。安藤家は明治以前には鰍沢に居住し、呉服商を営んでいたという。古文書なども残されており、富士川 1 の伝来理由も不明である。しかし、富士川 1 は富士川の水路に加えて、河口港の機能を有した清水港までの陸路を描いている点に特色があり、河川改修や開削といった目的ではなく、輸送経路を示すことを主眼としている。

富士川 2 と 3 は、安政 4 年（1857）から 6 年にかけて豪農小林八右衛門が出資して行なった水路改修のための計画図面として利用された絵図であることが明らかとなった。富士川 3 は小林家伝来の絵図である。富士川 2 は青柳河岸の河岸問屋であった小河内家所蔵である。同様の絵図の部分写真が依田敏太郎家所蔵として『増穂町誌』²⁸⁾ に掲載されているが、現在では所在の確認ができない。しかし、依田家文書²⁹⁾の一部が増穂町民俗資料館に保管されており、このなかの安政 5 年「富士川通岩切

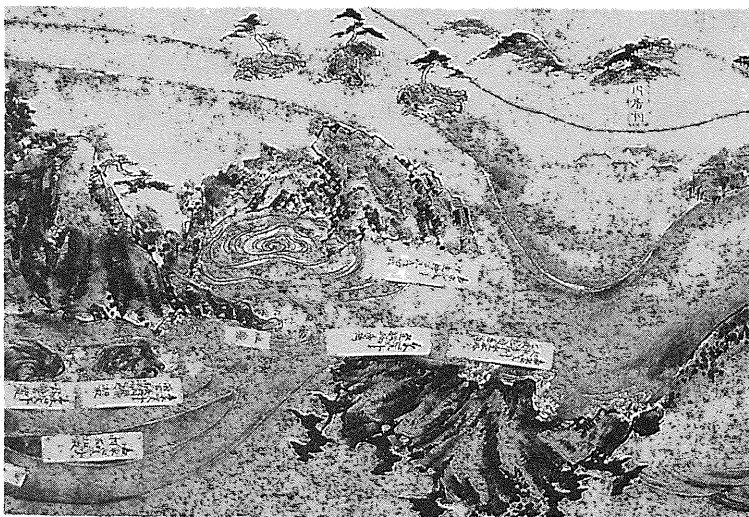


写真 3 富士川通鰍沢より岩淵迄絵図面（南巨摩郡増穂町 小河内為信家所蔵）
芝川合流点にある瀬戸島は溶岩流によって形成された。川幅が 5 m と狭まるため川船航行の難所となった。写真のように難所を極端にデフォルメしている点に特色がある。付箋の番号は工事箇所を示し、河川改修の計画図面として利用された。

普請二付書類写」によって絵図作成の経緯が判明する。塩商人であった依田喜有内は、水路改修の資金を必要としていた船頭衆の求めに応じて、青柳河岸の小河内太郎左衛門らとともに、小林八右衛門に出資を要請した。この時の普請箇所は安政6年「富士川通船難場岩石切取引退普請出来形帳」によれば27箇所であり、富士川2と3に示された27の朱筆番号と一致する。したがって、この絵図は河川改修を行なうための計画図であったことが明らかである。

IV 筑後川絵図の史料吟味

第3表に示したように、筑後川絵図を5点確認している。いずれも日田郡境から河口までを描き、奥書の年代が文政2年(1819)と弘化4年(1847)の2通りがあるが、表現内容はほぼ同一の写本関係にある。

筑後川1は2巻本で、浮羽郡吉井町の大石堰土地改良区所蔵の絵図である。大石堰は延宝2年(1674)に完成し、灌漑面積は1700町歩に及んだ。『久留米市史 第2巻』では、根拠は示されていないが、「宝暦年間以降の図」と推定されている³⁰⁾。

筑後川2は、久留米藩川筋見廻役であった木村桂三家に所蔵されている。川筋見廻役は受け持ちの河川・溝渠の普請などを担当しており、職務上筑後川絵図を所蔵したものと考えられる。

筑後川3・4・5の所蔵者は原所蔵者ではなく、収集された絵図である。筑後川3は郷土史家行徳平八家所蔵である。筑後川4は郷土史家鶴久二郎家所蔵である。筑後川5は古地図研究家の南波松太郎収集の絵図である。

筑後川絵図は、表現内容から判断すると久留米藩の作成によるものと考えられる。筑後川中・下流は久留米藩と佐賀藩の境界にあっていた。河道中の堰なども詳細に描かれているが、久留米藩領の村々を色別している。着色部分は村域を示しており、流路の蛇行によって囲まれた耕地についても帰属する村名を記している。この点から、堤外地の所有を示した河川絵図に分類した。これに対して、対岸の佐賀藩側でも同様の性格を有すると考えられる絵図がある。佐賀県立図書館には筑後川の絵図が数種類所蔵されている³¹⁾。そのうち佐賀藩旧蔵絵図を検討した結果では、天保12年(1841)の「御境川絵図」と、近世後期と推定されている「肥筑界川図」は仕立かたこそ異なるものの、第3表の筑後川絵図と類似の絵図であった可能性がある。

筑後川絵図のもうひとつの特色は、絵図そのものと奥書が一致していない点である。この絵図は文政2年または弘化4年の河口部における漁業裁定の奥書が記されている。しかし、河口部の漁場争論の裁許に用いられた絵図ならば、日田郡境まで描く必要性はない。したがって、この奥書ならびに漁場区域を示す朱線は後筆と考えられる。このように、河川絵図が他の目的のために再利用された例としては、第2表に示した最上川9「最上川谷地押切渡より柏沢迄絵図」などがある。

しかしながら、筑後川絵図のように現存が確認されるすべての絵図に、河口部における漁場裁定の奥書が記されている例は稀であり、それだけこの漁場争論が地域にとってきわめて重要な出来事であったことを窺わせる。そこで奥書の内容を検討しておきたい。奥書の文面は文政2年のものと弘化4年のものがあるため、両者をひとつずつ引用する。

第3表 筑後川絵図の所在一覧

1. 筑後川絵図	巻物 38×1,000cm	日田郡境一河口	文政2年(1819)	吉井町	大石堰土地改良区
2. 筑後川絵図	折本2冊	日田郡境一河口	文政2年(1819)	久留米市	木村桂三
3. 筑後川絵図	折本2冊	日田郡境一河口	文政2年(1819)	田主丸町	行徳平八
4. 筑後川絵図	折本 27×740cm	日田郡境一河口	弘化4年(1847)	三潞町	鶴久二郎
5. 筑後川絵図	折本 27×716cm	日田郡境一河口	弘化4年(1847)	神戸市立博物館	(南波松太郎)

注) 1番『筑後川50年史』筑後川工事事務所1976年 p. 852

2番『福岡県史資料 第9輯』1938年付図 『筑後川農業水利史』1977年口絵

『久留米市史 第2巻』1982年口絵, 本書では宝暦年間以降の作と推定 p. 744

文政2年 筑後川絵図 奥書 久留米市 木村桂三家 (カッコ内筆者注)
 右海面獵場之事, 三潞郡鐘ヶ江村獵士共肥前ノ者ト令喧嘩及公訴, 公儀御役人衆下向海面数度見分, 肥前柳川共立合之上又見分有之, 柳川天守目当ニ獵場杭木ヨリ方位被相極候, 右場所ニ鐘ヶ江青木島中古賀向島此辺ノ獵士共罷出候節ハ, 御国(久留米藩)肥前(佐賀藩)柳川(柳川藩)三ヶ国ノ印据り候札持出ル也, 此札七ヶ年目ニハ日田表ニテ右三ヶ国役人立合, 於同所新札出来引替被相渡候事

文政二卯年四月

公儀御役人衆	御代官	久須美六郎左衛門
		澤 弥 兵 衛
	御代官手付御普請役元ノ格	市 川 丈 助
	評定所書役	青 山 政 五 郎
	御代官手付	今 井 太 郎 九 郎
		小 野 幸 助

弘化4年 筑後川絵図 奥書 神戸市立博物館(南波松太郎)
 右獵場, 鐘ヶ江村獵師共肥前之者ト令喧嘩其末及公訴, 左ノ御役人御下向文政二卯年四月八日榎津町ニ御入込海面御見分有之, 同二十七日ヨリ肥前諸富ニ御引越又海面御見分之上, 右獵場杭木肥前柳川立合, 柳川天守目当方位相極候事

弘化四年未秋改之写

(公儀役人名は文政2年と同文のため省略した.)

文政2年の奥書より, 弘化4年は文政2年から7年目ごとに行われる4回目の新札引替の年にあたる事がわかる。すなわち, 弘化4年の奥書は漁場区域の確認のために再度書き直したものと思われる。

以上の漁場裁定の経緯については, 久留米篠山神社所蔵の嘉永2年(1849)写本の「漁場争論」文書に詳述されている³²⁾。文化10年(1813)6月29日, 久留米藩領の鐘ヶ江, 上青木, 下青木, 青木島

の者たちが、漁場をめぐる佐賀藩領湯津村の猟師3名を生け捕りにし、馬尿小便を吞ませた。文化12年2月27日、再び漁場争いが生じ、佐賀藩領の猟師が30余艘の漁船で取り巻き、鐘ヶ江村の猟師5名を殺害に及んだ。この争論が起こった原因は、双方の漁場区域が明確でなかったことによるとして、文政2年幕府寺社奉行が裁定を行なうことになった。この時、美濃紙縦3枚半・横2枚半の絵図を仕立てるとの申し合わせがなされたが、久留米藩が差し出した絵図は砂州なども少なく、佐賀藩の絵図と異なっていた。しかし、この寺社奉行に提出された絵図は、様式からみても筑後川絵図ではない。このため筑後川絵図は、川筋見廻役らがすでに所持していた絵図に、取り決められた漁場区域を図示して自ら利用したものと想定される。

V 木曾川川並絵図の史料吟味

木曾川・揖斐川・長良川の木曾三川は、河口付近の輪中地帯の治水に関する絵図が多く残されている。これらに対して、木曾川川並絵図は尾張藩木曾御用林の筏流しに関する絵図として興味深い絵図である。

木曾川川並絵図は、第4表のように写本も含めて5点が現存している³³⁾。上松一熱田間、正確には川合渡（現岐阜県福島町）より熱田の白鳥（名古屋市熱田区西町）までを描いている。近世では川合渡より下流を木曾川と呼び、白鳥は尾張藩の貯木場であった。尾張藩の木曾御用林は、熱田白鳥に到着した時には盗木などのために伐採量の半分に減少したといわれている。

木曾の伐採は八十八夜前後から始まり、11月末までに支流に木材を流す「小谷狩」を終える。同時に、木曾川本流を錦織（現岐阜県八百津町）まで管流しする「大川狩」が始まる。錦織には管流しされた木材を受け止める「綱場」が設けられており、翌年立春にはここで順次筏に組まれた。筏は犬山、円城寺（現岐阜県笠松町）、両国（海部郡）と流し、ここから海上を熱田白鳥まで運ばれた。延宝1年（1673）円城寺に川並奉行所が置かれ、尾張藩では対岸の北方（現愛知県一宮市）に同じく川並奉行所を置いた。

木曾川川並絵図の1番は、『岐阜県史 資料編 近世9』の付図として、後半部分の錦織から熱田までの写真が掲載されている。同書の解説によれば、上・下2巻で、「成立年代は享保年中（1716—35）と推定される作者不明の絵図」と記されている³⁴⁾。所蔵機関の事情により、原本を閲覧していないため推測の域を出ないが、作成年代などの記載がないのではないと思われる。しかし、後述するように、この絵図は木曾川川並絵図の原本ではないかと考えられる。なお、1956年に刊行された『笠松町史 上巻』にも「享保時代の木曾川図録」として笠松付近の部分写真が掲載されている³⁵⁾。この時点では蓬左文庫架蔵とされているが、名古屋市蓬左文庫と徳川黎明会徳川林政史研究所が分かれる以前であり、現在名古屋市蓬左文庫には木曾川川並絵図は所蔵されていない。

2番は一宮市北方の岡田家所蔵（一宮市立博物館保管）の絵図である。北方は川並番所が置かれ、岡田金右衛門は川並奉行手代主座を勤めた。役目柄、木曾川川並絵図を見る機会があったと考えられ、その写本を所持したものと想定される。現存しているのは前半部のみであり、錦織から熱田までの後半部分が欠本となっている。

第4表 木曾川川並絵図の所在一覧

1.	木曾川川並絵図	折本	上松一熱田	享保12年(1727)	徳川林政史研究所
2.	木曾川川並絵図	巻物 31×825cm	上松一錦織	—	岡田正男(一宮市博保管)
3.	木曾川川並絵図	折本 28×1,350cm	上松一熱田	明治10年(1877)	犬山市(文化史料館保管)
4.	木曾川通り絵図	巻物 19×440cm	上松一熱田	—	長野県大桑村 吉村義雄
5.	木曾川通絵図	巻物 31×3,000cm	上松一熱田	昭和16年写本4巻	徳川林政史研究所

注) 1番『岐阜県史 史料編 近世9』付図 1973年、『笠松町史 上巻』1956年 pp.714-715

2番『長野県アトラス』平凡社 1985年 pp.134-135

3番『犬山市史 史料編1 近世絵図集』1979年所収

4番『尾張藩と木曾の歴史展』名古屋城天守閣 1974年

5番『木曾川町史』口絵 1981年

3番は犬山藩旧蔵の絵図である。奥書によれば、明治10年に元犬山藩士近藤秀胤が、同じく犬山藩士であった水野家所蔵の絵図を写したとある。水野家ではこの絵図を「甚希有也尤可賞可秘可信者也」として秘蔵し、その伝によれば「小森先生」より許可をえて文化7年(1810)に写したとある。小森先生とはいかなる人物であったか不明であるが、すでに文化期には絵図本来の作成目的が失われ、もはや稀本となっていたことがわかる。

4番は名古屋市内の古書店から昭和3年頃に購入されたもので、木曾川川並絵図の最も簡略な写本である。

5番は片野温によって昭和16年1月に模写された写本である。4巻からなり、それぞれ長さ約750cmに及ぶ。この写本の原本は、以下に引用する「木曾川通絵図」第4巻の奥書によれば、享保12年(1727)5月に完成したとされる木曾川川並絵図である。

右此図ハ神谷勘右衛門と申者前方上松方相勤、木曾御材木川狩の裁許いたし川端数度、從來道の絶へたる所ハ材木に乗り下り、御領分他領入交り候内盗木等いたし候所をしらんため、勘右衛門自筆ニ委細乃絵図いたし置候付、此般錦織より名護屋白鳥まで式五里の所見分いたさせ右絵図に書足させ、都合川合渡より白鳥迄行程五十里余の所、川筋の絵図も如斯勘右衛門に認させ候、方角を訂候テハ殊の外場どり候ゆへ、水の流に南北を記し川端斗を書写させ申者也

享保十貳未五月

この奥書から、木曾川川並絵図の原本は1番であり、以下の絵図はその写本、または写本の写本であると想定される。1番と5番はともに、尾張徳川家の文書を引継いだ徳川林政史研究所の所蔵であり、5番の奥書から推定すれば享保12年の絵図は1番であろう。このような木曾川川並絵図の作成目的は、前述の引用文より明らかである。すなわち、上松の川狩役人であった神谷勘右衛門が上流部における木材の盗木を監視する必要性から作成していた絵図を、下流部まで監視を徹底させるために、錦織から貯木地である熱田の白鳥までを追加して描かせたのである。

VI 調布玉川惣画図の史料吟味

調布玉川惣画図は、関戸村（現東京都多摩市）の名主を勤めた相沢伴主がデッサンをし、これを江戸の絵師長谷川雪堤に描かせ、弘化2年（1845）に木版刷りされた河川絵図である³⁶⁾。大菩薩峠を遠景とした上流部から河口の川崎宿までを描いている。『国書総目録』にも「調布玉川画図」として掲載されており、都史料（東京都公文書館）、国立国会図書館、国立公文書館内閣文庫などに所蔵されている。このなかでも、多摩市立図書館所蔵の調布玉川惣画図は、木版刷りの上に筆彩が施されており、相沢家が所蔵していた絵図である可能性がある。相沢家には名主職として文書が所蔵されていたと考えられるが、付随文書は知られていない。

しかし、この絵図の作成目的は巻頭の序文によって窺い知ることができる。序文は、刊行の経緯を記したかな文と、玉川の水源、玉川の地名、沿岸の村々の名所旧跡などを記した「調布玉川絵図之弁」にわかれる。ここでは、かな文の箇所を抜粋する。

天保とをといへる歳（天保10年）のさつきはかりに、多摩の郡をかうち（小河内）の原むらの温泉に浴して、思へらく此地は玉川に添て甲斐の境にちかし、予もたまかはのほりにすみて其ミなもとをしらさればこたひ爰に遊へる、さちにその水源をきはめかへるさに川たけのくまくまを探り画かきうつし、亦玉川にそひたるむらさとに有ところの名所旧跡をも加へつらねむとほりしくはたて、画図頗なれりといへともいまた残れる所有によりて、猶五歳過（天保15年）今年神なつき、ふたたび水源に杖をひき其濫觴をきはめ、川にそひてくたることおよそ三十余里、はねた（羽田）うらにいたり画図ととのひなれり、しかして後予の親友武蔵野のゑのきと（榎戸）のさとの長なる榎戸某にかたれば、図をひらきみてこは人のたつねもとむるところ無下にひめおくへきにあらざれば、いそきさくら木にちりはめて好事の輩の玩にそなへよとのすすめにまかせて、板に彫らしむることとはなりぬ、弘化ふたつといへる歳（弘化2年）のいやよひもちの日（3月15日）、玉川の方かすみの関のあとなる関戸のさと人松蔭の翁、相沢伴主よはひ七そちあまり八にてしるす
(カッコ内筆者注)

このように、相沢伴主は天保10年（1839）と15年の二度にわたり玉川の水源を探索し、あわせて沿岸の名所旧跡を調べて、玉川の絵図に仕立てた。これを榎戸新田（現、国分寺市北町）の名主榎戸源藏の勧めによって木版刷りにしたとある。

調布玉川惣画図の作成目的は、玉川流域の地誌を絵図に仕立てることにあった。この時、相沢伴主の考えていた地誌は、『江戸名所図会』であり、『武蔵名所考』であった。このような地誌書が相次いで刊行されたことが、調布玉川惣画図の作成を促したであろうことは想像にかたくない。なかでも、相沢伴主がこの絵図で強く主張した点は、玉川の水源の比定であった。

現在の多摩川の水源は笠取山とされているが、相沢伴主は玉川の水源を甲斐国都留郡小菅村と武蔵国多摩郡川野村の境に比定し、現在の小菅川に流れ込む水流であるとした。この根拠として、寛文

9年(1669)の検地における小字の玉川をあげ、小菅村と川野村の名主に現地確認させている。すなわち、相沢伴主にとっての水源の定義は、水系のなかで玉川という地名が一番上流で使用されている所なのであり、したがって現在の多摩川の水源と異なっているのは当然である。こうした相沢の玉川水源説は、明治初期に作成された「玉川流域絵図」(世田谷区大場代官屋敷保存会所蔵)にも踏襲されている。

一方、相沢と同時代人であった山田早苗は『玉川派源日記』を著わし、同じく玉川の水源を考証している。山田早苗は青梅に生まれ、江戸で商売を営み、隠居後笠取山から流れ出る一の瀬川まで探索した。日記は天保13年(1842)に一応完成しているが、その後も随時追記されており、「小山田関の考」の追記の箇所にも調布玉川惣画図の序文の一部が記されている。山田早苗の玉川水源説は、多摩=太婆、すなわち丹波川と解釈して、丹波川の水源に近い三重川原(三条川原)を玉川の水源とした。

このように、近世後期の江戸ならびに江戸周辺では、相沢伴主や山田早苗のような地方文化人が地域に対する関心を強く持ち、地誌編纂という学問的営みへと向かわせていた。山田早苗の場合は克明な日記形式の叙述、相沢伴主の場合は絵図による玉川の表現として結実した。

Ⅶ お わ り に

本研究では、日本全国に現存している近世河川絵図の所在を明らかにし、これらの絵図の分類を試みた上で、写本も含めて複数現存し、かつ史料価値が高いと考えられる絵図を中心に史料吟味を試みた。もちろん、本研究で取り上げなかった近世河川絵図が今後も見出されるであろうが、従来この種の研究が皆無であっただけに、本研究は近世河川絵図の研究、ならびに近世河川絵図を用いた研究のひとつの指針を示すものと考えられる。

本研究においては、近世河川絵図のなかでも、河川交通に関する絵図を数多く取り上げた。なかでも、近代測量以前において、川船の通船水路を描き、特に難所を詳細に描くことを目的とした「近世河川水路図」を中心に、他の近世河川絵図との異同を明確にするよう努めた。河川水路図は、河川交通の管理・運営を行った藩・豪商・河岸問屋によって、水路の開削・維持など円滑な川船航行を目的として作成された。この絵図の表現上の特色は、川船の航行区間のみを表現し、河岸・番所などの施設、川船航行の障害となる難所、そして沿岸の集落を最低必要条件としている点である。木曾川川並絵図のような筏流しに関する絵図は、同じ河川交通に関する河川絵図という点で河川水路図の表現と類似するものの、綱場などの筏流し固有の表現がみられる。これに対して、筑後川絵図のように堤地所有を図示した河川絵図は、堤外地の所領区分、正確な蛇行表現、護岸堤や堰の位置が表現上の特色となっている。また、調布玉川惣画図のような地誌的な河川絵図は、河川そのものよりは兩岸の集落や寺社についての表現が卓越している。

以上のように、本研究は1979年から実施してきた近世河川絵図に関する所在調査のまとめである。日本は世界でもあまり類がないほど数多くの古地図が現存しているといわれている。このため古地図の研究も盛んではあるが、同種の絵図を体系的に把握する試みをさらに進めていく必要がある。個々の絵図に関しては十分吟味していない点も多々あると思われるが、この点は今後の課題としたい。

付 記

本研究は、筑波大学文学博士論文「近世河川水路図の空間認識研究」の一部である。御指導を戴いた黒崎千晴・山本正三・北見俊夫・芳賀登の諸先生に厚くお礼申し上げます。また、快く閲覧を許された絵図所蔵者の方々、現地調査に際して御協力を戴いた方々に心より感謝いたします。なお、本研究は昭和63年度筑波大学学内プロジェクト奨励研究を使用し、同年度の人文地理学会大会で報告した。

注・参考文献

- 1) 小野寺淳 (1980) : 北上川航路図に現れた船頭の自然知覚, 千葉徳爾編『日本民俗風土論』, 弘文堂, 141~159.
小野寺淳 (1985) : 絵図にみる近世河川航路の空間認識. 歴史地理学紀要27, 109~129.
小野寺淳 (1985) : 絵図にみる最上川の空間認識, 地方史研究協議会編『流域の地方史—社会と文化』, 雄山閣, 110~129.
小野寺淳 (1989) : 絵図にみる近世富士川水路の空間認識. 葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー—下巻』, 地人書房, 92~111.
- 2) 地方史研究協議会編 (1979) : 『歴史資料保存機関総覧』東日本編・西日本編. 山川出版社.
- 3) 岩波書店国書研究室編 (1963~72) : 『国書総目録全8巻』, 岩波書店.
- 4) 岐阜古地図研究会編著 (1979) : 『美濃・飛騨の古地図』, 教育出版文化協会.
- 5) 熊本県教育委員会 (1987) : 『熊本県歴史の道調査—菊池川水運』. 口絵参照.
熊本県立図書館編 (1954) : 『熊本県古地図目録』, 熊本県立図書館.
- 6) 東京市役所編 (1675) : 『東京市史稿 上水篇 附図』, 臨川書店復刻.
- 7) 建設省京浜工事事務所企画 (1986) : 『多摩川誌—別巻/写真・図集』, 河川環境管理財団. 68~69.
- 8) 大石 学 (1986) : 明治初期における玉川上水の実態. 東京都教育委員会編『玉川上水文化財調査報告』所収, 62ページ.
- 9) 小野寺淳 (1983) : 明治前期の阿賀野川水路図について. 阿賀路23, 73~77.
- 10) 小野寺淳 (1987) : 利根川水運の川絵図について. 千葉県立大利根博物館調査報告2, 62~66.
- 11) 群馬県史編さん委員会編 (1978) : 『群馬県史 資料編10 近世2』, 群馬県. 口絵掲載.
- 12) 大塚 隆 (1975) : 畿内の古版川絵図. 月刊古地図研究76.
原田伴彦・矢守一彦・矢内 昭 (1980) : 『大阪古地図物語』, 毎日新聞社.
- 13) 伊勢戸佐一郎 (1987) : 大川便覧解説—なにわ川口船番所から京・伏見まで. 大阪春秋50, 74~79.
- 14) 柳原書店 (1978) : 『淀川兩岸一覽・宇治川兩岸一覽』, 柳原書店.
- 15) 前掲7). 74~75.
- 16) 丹治健蔵 (1984) : 『関東河川水運史の研究』, 法政大学出版局. 215ページ. 「関八州川筋絵図」をもとにした図が示されている.
川名 登 (1984) : 『河岸に生きる人々—利根川水運の社会史—』, 平凡社. 本書の見返しには, 静嘉堂文庫所蔵の「関東水流図」の写真が掲載されている.
- 17) 熊本県教育庁文化課村上豊喜氏の御教示による. 球磨絵図は, つぎの文献に写真が掲載されている.
村田公三郎 (1983) : 『郷土巡検球磨人吉の自然と人文』, 熊本県立球磨商業高等学校社会科. 熊本県教育委員会 (1984) : 『熊本県歴史の道調査—人吉街道—』, 口絵掲載.
『湯前町史』では「安永2年の球磨絵巻」として写真が掲載されている. 高田素次編著 (1968) : 『湯前町史』, 湯前町.
- 18) 米沢市市史編さん室にて閲覧.
- 19) 『御家中諸士略系譜 4』, 米沢市立図書館所蔵.
- 20) 新庄北高等学校教諭梅津保一氏の御教示による.
- 21) 矢吹町編 (1980) : 『矢吹町史 第1巻 通史編』, 矢吹町. 476-486.
- 22) 福島県 (1967) : 『福島県史 第10巻上 近世資料3』, 福島県. 本書の口絵には, 阿武隈川2と3の写真が掲載されている.
- 23) 安田初雄 (1980) : 近世の阿武隈川水路絵図につ

- いて. 東北福祉大学紀要5-2, 83~104.
- 24) 古田良一 (1937) : 東北地方に残れる河村瑞賢関係史料. 東北帝国大学文化会「文化」4-11. 113 ページ.
- 25) 田中館秀三 (1937) : 阿武隈川水路図. 東北帝国大学文化会「文化」6~7. 42ページ.
- 26) 前掲23). 86ページ.
- 27) 青山靖 (1959) : 『富士川水運史』. 地方書院.
- 28) 増穂町史編纂委員会編 (1976) : 『増穂町誌 下巻』. 増穂町. 477ページ.
- 29) 山梨県立図書館には, 依田家文書のマイクロフィルムが保管されている.
- 30) 久留米市史編さん委員会編 (1982) : 『久留米市史 第2巻』. 久留米市. 744ページ.
- 31) 島内二郎編 (1973) : 『佐賀県立図書館所蔵古地図目録』. 佐賀県史料刊行会.
- 32) 九州大学九州文化史研究施設所蔵本による.
- 33) 西尾市立図書館岩瀬文庫所蔵の「木曾川両岸図」などの絵図は, 木曾川川並絵図とは異なる.
- 34) 岐阜県 (1973) : 『岐阜県史 史料編 近世9』. 岐阜県. 66~67.
- 35) このほか, 『各務原市史 史料編 近世II』. 1985年にも「木曾川通し絵図」として写真が掲載されている. 同書553ページ.
- 36) 多摩市教育委員会より「調布玉川惣画図」の複製が発行された.
- 小野寺淳 (1988) : 地誌的な川絵図としての「調布玉川惣画図」. 地図情報センター編『調布玉川惣画図解説』. 多摩市教育委員会所収. 5~8.

Classification and Examination of River Maps of Edo Era

Atsushi, ONODERA

Although many river maps were drafted in the edo era, majority of them have been overlooked by previous studies. This study, therefore, identifies the location of these maps and classifies them. It also examines the purpose, date, and landscapes of the river maps with high historic value.

River maps of edo era are classified into the following five categories: (1) maps prepared for flood control, (2) maps showing the ownership of the land between levees, (3) maps showing the channels for drinking water and irrigation, (4) maps of river transportation, and (5) maps for regional description.

Representative river transportation maps include Kitakami, Mogami, Abukuma, and Fuji River Maps. Although few Japanese rivers are used for transportation now, rivers were the main transportation routes in the edo era. Several important maps were made for the transportation in Kitakami, Mogami, Abukuma, and Fuji River. These maps contain the detail information concerning navigable routes and obstacles for navigation.

Kiso River Map was prepared for rafting, for the upper Kiso area produced many woods. This river map identifies the route for rafting, obstacles, and other related facilities.

Chikugo River Map designates the land ownership of the Kurume clan in the area between the levees, for Chikugo River was located at the boundary between Kurume and Saga clan. This river was also used for the dispute of the fishing right at the mouth of the river in the 1820s.

Tama River Map was made in 1845 by an educated resident on Tama River to describe the area. Tama River was used for drinking by the edo citizens. He made a research of etymology of Tama and drafted the landscapes from the mouth to the uppermost part of the river.

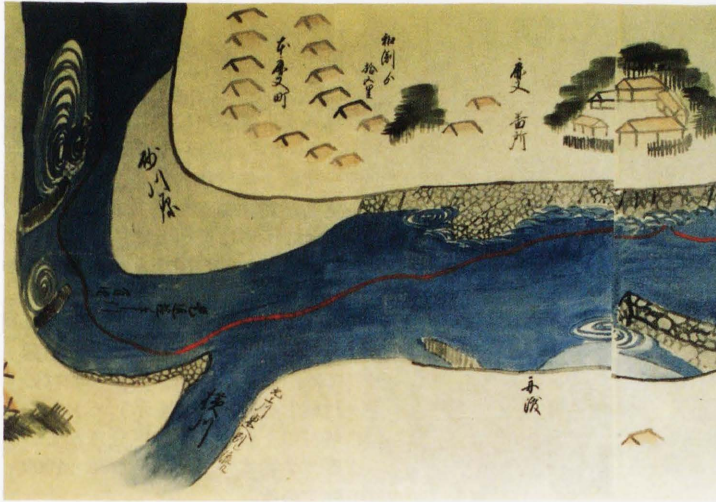


写真4 北上川黒沢尻河岸より石巻湊迄之絵図（岩手県立図書館所蔵）

弘化年間（1844-47）の作，27.5×4465cm，河川水路図の中で最も長い巻物である。写真は仙台平野の鹿又の部分。巻物の紙幅の中で蛇行を忠実に描くため，紙のつなぎ目で河川を断ち切っている。赤線が川船の舟道を示す。



写真5 最上川川通絵図（山形市立大郷小学校所蔵）

寛文8年—寛保2年（1668-1742）の作，山形船町—酒田間を27×870cmの巻物に仕立てている。写真は最上峡の部分であり，見る者に紅葉の季節を感じさせる配色がなされている。また，河川を軸に兩岸の景観を展開して描いており，河川水路図ではこのような展開図法が一般的である。



写真6 阿武隈川舟運図（福島市資料展示室所蔵）

明和6年—7年（1769-70）の作，福島—水沢間30×1285cmの巻物である。河川水路図の中では数少ない鳥瞰図法の絵図である。鳥瞰図法は立体的な表現を可能にするが，写真のように手前に山があると沿岸地先を描けない。そこで，この絵図では別紙に描いた山を貼り付けて，山を手前に倒すと沿岸地先を見ることができるよう工夫されている。

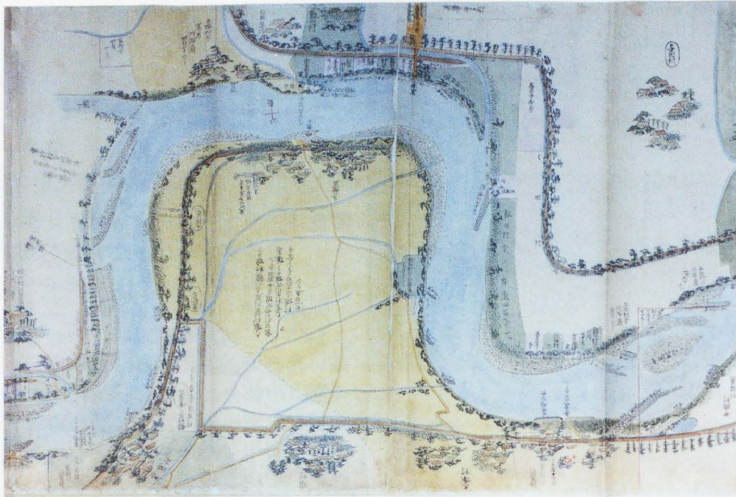


写真7 筑後川絵図（浮羽郡吉井町 大石堰土地改良区所蔵）

文政2年（1819）の漁場争論の奥書が書き加えられているが、絵図そのものは奥書とは別の目的で作成された。日田郡と浮羽郡の郡境より河口までを描き、兩岸に分布する久留米藩領の村々を緑・黄などに着色して示している。写真では、黄色は久留米藩領大城村の村域とその堤外地を示しており、他村のそれと明瞭に区分されている。2巻本で、あわせて38×1000cmである。



写真8 木曾川川並絵図（大山市 文化史料館保管）

明治10年の写本、28×1350cmの折本に仕立てられている。川合渡から貯木場の熱田までを描き、写真は錦織（現岐阜県加茂郡八百津町）の部分。錦織は木曾川屈指の綱場で、一本ずつ管流しされた木材を筏に組むため、兩岸に綱が渡たされている様子が描かれている。



写真9 調布玉川窓画図（多摩市立図書館所蔵）

関戸村（現東京都多摩市）の名主相沢伴主が江戸の絵師長谷川雪堤に浄写させ、弘化2年（1845）に30×1335cmの巻物の木版刷り絵図を刊行した。序文に続く「調布玉川絵図之弁」に流域の地誌的内容が簡潔に記載されている。写真のように集落と社寺を中心に描き、関戸村の遠景には富士山を配している。